

## 絶体的45分

### ◆登場人物

◇ロック・・・・囚人1。妹大好き人間。ただし、ギャグ路線でなくガチ路線。気さくだが生真面目。他者依存。

◇ジャック・・・・囚人3。気が弱くおどおどした印象を与える。異常欲求。

◇ケビン・・・・囚人2。気が強くはきはきした物言いをする。

思ったことをオブラートに包まず口に出すB型。

そして囚人の中でもっとも頭脳明晰。過剰欲求。

◇箱の人・・・・箱の中に隠れて指令の紙を出す人。実はこの刑務所の主任看守。

◇所長・・・・刑務所の所長

### ◆舞台設定

◇設定上は、ある刑務所の特殊試験場。

◇この試験に合格したものは模範囚の中でも特別に早期退所が認められる。

◇立方体の部屋で真ん中には人が隠られる程度の指令を出す柱が立っている。

◇椅子が3脚と壁には大きな白い紙が貼られている。

### ◆前提条件

◇きっちり9分刻みで展開する完全45分芝居。

◇9分を知らせるSEは音響側で時間を計って正確に鳴らす。(予定)

☆第1場・059分パート

舞台上には3人の囚人がいる。

ロックとジャックはなにやら会話をしている。

ジャックの手には紙が握られている。

ケ빈は黙ってじっとして動かない様子。

ロック 『へえ、そうなんだ・・・ところで「シューカツ」で何かやってた？』  
ジャック 『「シューカツ」ですか？』

ロック 『ああ、俺も。(キーボードをたたくそぶり)こっち系です』  
ジャック 『結局役に立たなかったですけど』

ロック 『いやいや、昔やったことはいつか役に立つよ。すべてはこの試験の結果次第だけだな』  
ジャック 『そういえば、名前聞いてませんでしたね？』

ロック 『あ、そうだな。俺は「ロック」・・・あだ名でいいよな？』  
ジャック 『そうですね。じゃあ私は「レッカ」・・・』

ロック 『「レッカ」？』  
ジャック 『あ、いえ・・・「レッカージャック」って呼ばれてました。前に駐禁を取られたときに頭にきちゃって、レッカー車ごとのって帰ったら、地元の友達にそう呼ばれて』

ロック 『意外と破天荒だな』  
ジャック 『はは。長いんで、今は「ジャック」って呼ばれますけど』

ロック 『よろしく、ジャック』

◇ジャックがケ빈の方を見る

ジャック 『そういえば、あの人ずっと不機嫌そうですよね』

ロック 『ああ、たまにいるよね。ああいう感じの人』

ジャック 『このままだと、ちょっとかわいそうじゃないですか？』  
ロック 『ん、そうか。よし・・・』

◇ロックがケ빈の方によっていく。

ロック 『あ、すみません』  
ケ빈 『(ロックを一回見て)・・・』

ロック 『俺「ロック」って言います』  
ケ빈 『・・・』

ロック 『あ・・・』  
ケ빈 『ここが何をやる場所かわかっているのか？』

ロック 『え？・・・試験だと思うけど』  
ケ빈 『そうだ。たった一人の合格者を選ぶために、ここに集まっている。「敵」となれなれしくする必要なんかない』

ロック 『なんだよ。せっかく声かけてやったのに』  
ケ빈 『余計なお世話だ。かまわないでくれ』

ジャック 『・・・でもそれだと』  
ケ빈 『まだ何か？』

ロック 『あなたの評価にかかわると、思うんだけど』  
ケ빈 『ん？なんでだ？』

◇ジャックが申し訳なさそうに手に持っている紙をケ빈に渡す

ケ빈 『「指令1・・・日常会話を楽しむこと」・・・なんで教えてくれなかったんだ！？』

ロック 『それは、不機嫌そうにしてたから』  
ケ빈 『じゃあもう試験始まってんのか？』

ロック 『だから言ったのに』  
ケビン 『ちくしょう！・・・まずは自己紹介だな？』

(カメラを探すそぶりで)俺は「ケビン」。趣味はネット鑑賞とネットゲーム、あとはユーチューブで「熱湯コマーシャル」と「ジャネット・ジャクソン」の動画を見るのがマイブーム』

ロック 『ネットばっかだな』  
ケビン 『目標は、一週間に一日外出をすること。調子がよければ二日も出るぞ』  
ジャック 『引きこもりですね』  
ロック 『急に元気だな。まあ、ここで合格したいのはみんな同じだもんな』  
ケビン 『当たり前だ。このご時世「シューカツ」は、まともに生きるために必要なんだ』  
ロック 『そらそうだ。でもそんな無理しなくてもいいんじゃない？あんた面白いね』  
ケビン 『馬鹿にしてんのか？』  
ロック 『別にそういうつもりじゃ。よろしく』

◇ロックが握手を求める。それにおずおずと答えるケビン。

ケビン 『お、おう』  
ロック 『ジャックも』  
ジャック 『え？は、はい』

◇三人が手を重ねあわせると

ロック 『よし、俺たちの贖罪を終わらせる「終贖活動」の始まりだ』

◇オープニング

暗転すると音楽が流れる  
音楽が終わると明かりがつき、三人が暗転前の配置で立っており、上を見上げている。

ロック 『今のってなんかの合図？』

ジャック 『さあ？』  
ケビン 『ああ、あれだ。きつと突然不可解な状況を起こして俺たちがどんな反応を見せるか試したんじゃないのか？』

ロック 『急に暗くなったらびっくりするじゃないか。ああ、早くシヤバの空気が吸いたい』

ケビン 『ここを出たら、それこそ本当に「就職」するんだ。それが俺の目標だ』

ジャック 『とかいって、また引きこもってネット三昧なんじゃないですか？』

ケビン 『馬鹿にしてんのか？』

ジャック 『あ、いえ、そんな』

ケビン 『ははは！冗談だよ』

ジャック 『やめてくださいよ。そういうの苦手なんですよ！』

ロック 『ジャックは中学のときいじめられキャラだっただろ？』

ジャック 『そんなことありませんよ！・・・「いじめられキャラ」でしたよ』

ケビン 『おんなじじゃん！』

ロック 『はははは！』

ジャック 『はははは！』

ケビン 『はははは！』

◇三人、笑いあう

すると「第二の指令」を知らせる音が鳴る

ジャックのみが笑い、ロック・ケビンはすつと笑うのをやめ、おのおの席に戻る(上下の箱椅子)

ジャック 『はははは！・・・あれ？』

ケビン 『いつまで笑ってるんだ。本当に馬鹿なんじゃないか？』

ジャック 『え？・ロック？』

ロック 『・・・』

ケビン 『はじめの指令は終わった。仲良しごっこは終わったってこと』

ロック 『ジャック、次の指令が出てるんじゃないか？』

ジャック 『（軽くうつむく）』

☆第2場…9～18分パート

◇ジャックが近づくと、中央の箱から物音がし、それに注目する3人箱からぎこちなく紙が吐き出され、ジャックが拾う  
取り合えず物音は無視する

ジャック 『読みます』

ロック 『・・・ああ』

ジャック 『「壁にかけられている紙を一枚はがしなさい」』

ロック 『紙？（壁にかかっている紙を見て）これだよな』

◇ロックが紙をはがす  
すると数学パズルの魔方陣が現れる

ジャック 『「3つのパズルを一人ひとつずつ順番に解きなさい。ただし他人からのヒントは禁止とする」』

ケビン 『じゃあ俺が先に解く』

ロック 『は？なに言ってるんだ』

ケビン 『・・・』

◇ケビンは無視して壁際に置いてあったペンを手に取り、問題の前に立ちはだかる

ロック 『だから待ってって！ほんと、協調性がないんですね。あなたは』

ケビン 『知るか』

ジャック 『あの、ちよつと』

ロック 『ここでいい結果を出したいのはわかるけど、ちよつと強引なんじゃないか？』

ケビン 『指令聞いただろ？このパートは早く解いたもん勝ちなんだよ。』

それに、問題を解く順番くらいでピーピーピーうるさいんだよ』

ロック 『なんだと?!』

ジャック 『ちよつと待ってください！さっきまで仲良くしてたじゃないですか？』

ケビン 『もうちよつと雰囲気よくやりませんか？』

『馬鹿じゃないか？あれは指令があったからだろう？仲良しごっこする気はない。あんたもそうじゃないのか？』

ジャック 『じゃ、じゃあ、せめて公平にじゃんけんで決めませんか？』

ケビン 『・・・』

ロック 『そのくらいいいだろう？それとも後半の問題は解く自信がないとか？』

ジャック 『もう、煽らないでください』

ケビン 『まあいい。さっさと済ませよう』

◇じゃんけんをする3人

ロックが1番、ジャックが2番、ケビンが3番目になる。

ケビン 『くそっ』

ロック 『じゃあ、お先に』

ケビン 『さっさと解けよ』

◇ロックはケビンの言葉に耳を貸さず、魔方陣を解く。

ケビンは椅子に座る。

ジャックはケビンから離れ二人の間で左右を見る。

所在なげに指令の書かれた紙を裏返したりして眺める。

ジャック 『空気悪いなあ・・・』

ロック 『ごめん、つい頭にきて』  
ジャック 『まあ、あれじゃ仕方ないですけど』  
ロック 『……』

ジャック 『でも、不思議な制度ですよね……』

ロック 『なにが？』

ジャック 『いくら私たちが模範的だといっても犯罪者には変わりないわけですよね』

ロック 『まあ、そうだけど』

ジャック 『自分たちみたい犯罪者が十分に罰を受けないまま、出ていっていいのかな？』

ロック 『いやだから「殺人を除く、実刑3年以上無期懲役未満の模範囚に限る。」って説明だったはずだけど』

ジャック 『はい。少子化の影響から、社会全体の人材不足がひどくて、それをなんとかしようと、犯罪者でもいいから働かせるのが目的だつて』

ロック 『ただ単に、ブタ箱が足りないだけだと思っただけ』

ジャック 『末法の世ですね』

ロック 『マップ？』

ジャック 『いや、「マップ」じゃなくて「マップウ」です。「世も末」だつて意味ですよ』

ロック 『ふーん。よし解けた』

◇そのタイミングで魔方陣を解き終え、判定を待つ。

正解の音が鳴り、紙をはがしペンをジャックに手渡す。

それと交換するように指令の紙をロックへ渡す

ロック 『これは、川渡しゲームだね』

ジャック 『どういうゲームですか？』

ロック 『簡単だよ。狼は羊を食べる。ただし、飼い主がいるところでは食べられない。』

そして船には動かす人と、羊か狼のどちらか一体しか乗せられない。それを踏まえたうえで2匹の羊を反対の岸に移動させるっただけ』

ジャック 『わかりました』

◇ロック、一度座る。

ジャック 『……もしここで勝ち抜いたらどうするんですか？』

ロック 『ん？』

ジャック 『実家に帰るとか？』

ロック 『まあそんなところかな？』

ジャック 『お母さんの料理とか懐かしいんだろ？』

ロック 『……親は、いない。子供の頃に、隣んちの火事に巻き込まれて』

ジャック 『あ……ごめん』

ロック 『いや、本当に前のことだから。今は妹と二人で暮らしてる』

ジャック 『妹と二人？』

ロック 『うち母子家庭で。母さんは逃げ遅れて病院に運ばれた後に……うん。今は妹が一人だけ』

ジャック 『なんか、変なこと聞いちゃった？家はどの辺だったの？』

ロック 『わかるかな？「西大久保」ってとこなんだけど』

ジャック 『え?!』

ロック 『え?!』

ジャック 『……ん？あ、ああ、知ってる。近く……に親戚が住んでたから』

ロック 『近くに知り合いがいたなら聞いたことない？昔、連続放火があったって』

ジャック 『ええ』

ロック 『俺んちの隣の家もその連続放火の一軒だった。近くのゴミ捨て場から出た火に巻き込まれたつて……犯人は「レツカ」っていう連続放火魔だった』

ジャック 『……』

ロック 『だからさつき「レッカ」って言ったときびっくりしたよ。まあでも俺ら同年くらいだよな？歳が合わないもんな』

ジャック 『はい・・そのときは私も子供でしたよ』

ロック 『だよ。もしお前が「レッカ」だったら殴りかかったよ。』

今は一刻も早く帰ってやらないと。・・ところで、ジャックはなんでこの試験を？』

ジャック 『たいした理由は、ないですよ。こんなとこ誰だって早く出たいじゃないですか』

ロック 『それもそうか』

◇おもむろにケビンが立ち上がりロックのほうを覗き込む

ロック 『な、なんだよ？』

ケビン 『その紙、裏になんか書いてないか？』

ロック 『うら？』

ケビン 『貸してみる。「ただし、全員正解しない場合は失格とする」』

ロック 『何だって?!』

◇二人がジャックのほうを見る。

ゆっくり悩んでいるジャック。まったく手付かずの状態となっている。

ケビン 『あいつ、やりやがったな。わざとだ』

ロック 『いや、それはないだろう。全員失格ならジャックもだ』

ケビン 『くそ、でもさつきあいつ紙の裏を見てたぞ』

ロック 『そんなことより、今は残り時間が少ない。何とか解かせないと』

ケビン 『でもヒントは禁止なんだぞ？』

ロック 『まじめだな。会話の中でそれとなく伝えれば大丈夫』

ケビン 『本当に大丈夫なのか？（カメラを探す）でも、このままじゃ結局失格か』

ロック 『やってみよう』

◇ロックとケビンはジャックに声が届くように会話を始める

ケビン 『オオカミがさ、最近オオカミがうちの近所で出たんだよ』

ロック 『ああ、そりや大変だ』

ケビン 『でな、このままじゃ「羊が食われる」って知り合いの羊飼いが川向こうに牧場を作った』

ロック 『ストレートすぎるな、もうちよつと間接的に』

ケビン 『うーん、居酒屋の女将がさ、知り合いの富豪の執事を狙ってるらしいんだ』

ロック 『ひねりすぎだけど、まあいいか。で？』

ケビン 『その富豪が女将を言いくるめてクルーザーに乗せ、海の向こうに一旦連れて行った。女将を一旦、連れて行った』

◇ジャックはその言葉に従い、羊飼いとオオカミを乗せた船を対岸に移動させる

ケビン 『そして、富豪は執事を連れに帰り』

◇オオカミを乗せたまま戻ろうとするジャックを見て

ケビン 『女将は置いていった。川向こう、いや無人島に』

ロック 『富豪、ひでえな』

ケビン 『戻ってきた富豪は、一人の執事を連れもう一度無人島へ』

◇ジャックは羊飼いと羊を船に乗せて対岸へ移動

ケビン 『よし、そうしたら、富豪は』

◇ジャックはケビンの話を聞く前に、羊飼いをのせた船を動かそうとする

ケビン 『やめろ！早まるな。富豪が見ていない隙に女将が執事を食ってしまう』

ロック 『女将積極的だな』

ケビン 『お前は茶々入れてないでサポートしろよ！』

ロック 『よし！いいぞ女将』

ケビン 『なんでだよ！もういい！』

◇ジャック、船を持ってあたふたしている。まずは元に戻そうとする。

ケビン 『そうだ。そして、女将を見張るためもう一度クルーザーに乗せ、地元に戻ったらしい』

◇船にオオカミと羊飼いを乗せ、元の岸へ移動

そこでオオカミからおろそうとするジャックを見て

ケビン

『さて！女将は一瞬の隙さえ見逃さない。富豪から先に降りたんだ。その後を女将がついて降りてきた。富豪はすかさず執事を連れ、女将の毒牙の届かない無人島へ旅立った』

◇ジャックは最後の船を対岸に渡し、羊と羊飼いをおろした状態で、判定の音を待つ。

なかなか音が鳴らない。

ちよつと間があつて正解の音が鳴り、ほつと胸をなでおろすケビンとロック。

ジャック 『ケビンさん。もう時間がありません』

ケビン 『誰のせいだよ。つたく、ペンかせ！』

◇乱暴にペンを奪い、紙を破り、次の問題を表示させる。

すると、複雑な数式のような問題がびっしり書かれている。三人、固まる。

ロック 『うわ、これは』

ジャック 『だめだ・失格かあ』

◇ひざをつくケビン。

すると、おもむろに顔を上げる。

フレミングの法則を左手で作り、顔の前に掲げる。

ケビン 『・・・実に、おもしろい』

◇ものすごい勢いで問題の解答を書き込む。

見る見るうちに問題は解かれ、解答したところで息を切らしながら、回答の判定を待つ。

◇正解の音が鳴ると、三人いっせいに安堵の声をもらし、その場に崩れ落ちる。

ロック 『すごい、ケビン。頭いいんだな？』

ジャック 『意外ですね〜』

ケビン 『あんな簡単な問題が解けなかったやつに「意外」とか言われたくない』

ロック 『いや、でもたいしたもんだよ。俺ならアウトだった』



◇次の指令の音が鳴る。中央の箱から大きな物音。三人、中央の箱に注目する。すると、またも箱からぎごちなく紙が吐き出される。紙の出る隙間から手のはみでており三人が驚く。

ジャック 『今の見ましたか？』

ケビン 『見た。なんだこの箱、人が入ってるのか？』

◇ロック、箱を軽くたたく。反応はなし。

ケビン 『いるなら出て来い！』

◇ケビン、箱をたたく。反応はなし。

ロックとケビンが思い思いに箱をバシバシとたたく。ジャックはそれを心配そうに見ている。すると突然箱（ナカタ）が立ち上がる。驚く三人。

ナカタ 『いい加減にしてください！』

ケビン 『誰だおまえ！』

ナカタ 『乱暴にしないでくださいよ。私は箱の中から指令の紙を出すだけの人です。こんなことして！ルール違反ですよ？』

ケビン 『ルール違反？紙を出すたびにガタガタさせやがって。お前がへたくそだからだろ？』

ナカタ 『そんな態度で、いいんですか？』

ケビン 『何が？』

ナカタ 『私は審査側の人間ですよ』

ケビン 『先生！お怪我はありませんか？』

ジャック 『あの、審査側の人ってことは、職員の方ですか？』

ナカタ 『そういうことになりませんか？』

ジャック 『じゃあこの試験の判断基準も知ってるんですね？』

ナカタ 『どうでしょう？知っていたとしても教えられません』

ジャック 『合格するためにはどうしたらいいですか？』

ナカタ 『ダメです。教えられませんね』

ケビン 『ケチ臭いなあ。わからないように教えてくれればいいだろう？』

ナカタ 『マイナス1点』

ケビン 『（ジャックに）お前なあ、常識的に考えてわかんないのか？（カメラを探す）』

ナカタ 『ははは、冗談ですよ。私に審査権はありません』

ケビン 『なに！』

ロック 『ストップストップ！時間なくなるから次の指令を頼むよ』

ナカタ 『失礼しました。では参ります。「現在の成績に、全員納得の上で順位をつけなさい」』

ジャック 『順位？どういうことですか？』

ナカタ 『三人で相談して今の順位を決めてください』

ケビン 『相談って・・・みんな一位になりたいに決まってるだろ！』

ナカタ 『聞いてると思いますが、各パートの制限時間は9分です。その時間内に収めてください』

ケビン 『俺が一位だ！一番難しい問題を解いたのは俺だ！』

ナカタ 『三人納得の上でいいました。あまり強引に進めると「審査」に関わりませよ？』

ケビン 『・・・じゃあどうするんだよ』

◇三人顔を見合わせる

ロック

『まずは紙に書いて整理しよう。今のところ指令1と2が終わったところだから、各指令の順位ごとに得点をつけて、その合計で決めるのはどうかな？』

ケビン

『勝手に仕切るな。得点が同じになった時はどうするんだよ？』

ジャック 『また公平にじゃんけんですか？』

ケビン 『じゃんけんのどこが公平なんだ？そんなので決めるなんて納得できない』

ロック 『同点の場合は、また話し合おう』

ケビン 『話し合いなんかで決まるわけないだろ』

ロック 『じゃあ、何ならいいんだよ？・・・(ナカタに)何とかしてくれよ』

ナカタ 『ケビンさんも納得のいく、いい方法が思いつきましたよ』

ケビン 『なんだよ？』

ナカタ 『試験が始まってから誰も自分の「罪」について話されていませんよね？』

ジャック 『・・・』

ケビン 『そんなもん聞いてもしようがないだろ？』

ナカタ 『そうですか？そこで、こんなのはどうしよう？・・・「罪」の内容によって得点をつける。

ケビン 一番私の同情を引いた話に得点をあげましょう』

ナカタ 『は？なんでお前の同情なんか引かなきゃいけないんだ』

ジャック 『悪い話じゃないと思いますよ？』

ロック 『わ、私は反対です』

ジャック 『じゃック？』

ナカタ 『そ、そんなことしなくても順位くらい決められますよ』

『あれ？ジャックさん。なにか都合が悪いですか？始まったばかりのときも

ここを出たい理由について、たいしたことじゃないと言っていましたよね？本当は何か隠して

るんじゃないですか？』

ジャック 『それは・・・』

ケビン 『なんかあるのか？ジャック。俺に有利なことか？』

ロック 『二人ともやめろ。あんたも悪乗りしすぎ』

ナカタ 『え？箱の中で退屈してたんですから、このくらい許してくださいよ。

まあ無理には言いませんが、あなたにだけ不利な話じゃないはずですよ。どうですか？』

◇ジャックが考え、少しの間があり口を開く

ジャック 『わかりました。あ、「同点になったら」の話ですよ？』

ナカタ 『では、順位をつけましょうか？時間ないですからほら早く』

ロック 『あ、ああ』

◇ロックはナカタから紙とペンを受け取り、現状を整理し始める

ロック 『まず、指令1の「日常会話」についてだけど、ケビンは協調性に欠けたから最下位？』

ケビン 『なに？それはお前たちが』

ナカタ 『まあまあ』

ケビン 『フン！』

ロック 『それで、俺とジャックだけど・・・』

ジャック 『ロックが一番でいいです。私はずっと受身でしたから』

ロック 『そう？わかった。じゃあ、一位が俺で二位がジャック。三位がケビンな。指令2の「パズ

ル」は』

ケビン 『あれは文句なしで俺がトップだろ。・・・何だよ、納得いかないか？』

ロック 『いや、ケビンのおかげで助かった部分もあるしな』

ジャック 『私は二人に助けてもらったから』

ロック 『ここは俺が一番簡単な問題を解いたから最下位でいい』

ジャック 『え？でも』

ケビン 『はーっ、また仲良しごっこか？さぶいぼ立ってきたよ』

ロック 『(咳払い) じゃあ、1位を3点、2位を1点、3位を0点として、ここまでの得点を数え

ると・・・(紙に書きながら) ジャックが「2点」俺が「3点」ケビンも「3点」』

ナカタ 『望みどおりの展開ですね。では、順番に聞きましょうか』

◇ナカタが促し、三人を座らせる

ナカタ 『選ばれた人には2点差し上げましょう！』

ケビンさんかロックさんが勝てばどちらかが一位になります。ジャックさんが勝てば、二人を差し置いて逆転優勝ですね』

ケビン 『さて、そんなの聞いてないぞ！』

◇ケビン、椅子から立ち上がる。ナカタが目で殺して

ケビン 『くそ・・・』

ナカタ 『ではまずロックさん、お願いします』

ロック 『はい』

◇ロックが椅子から立ち上がり前へ出る

照明が切り替わり、ロックだけを浮かび上がらせる。

ロック 『俺は人を傷つけました。妹の「佳奈子」に、付きまとう男がいて、そいつと揉み合いになつたときのことです。』

それは、付きまとい始めてから、何ヶ月か経つた日のことでした。

いつもどおりに聞き耳を立ててると、玄関で物音がしたんです。

様子を見に行くと・・・ついに、そいつが家に入ってくるのが見えました。

なんとか玄関で食い止めたんですが「佳奈子を出してください」「いるなら会わせてください」とか騒ぐので、とっさに手に持っていたバールのようなもので応戦しました。

・・・気づくと、俺は警察署で取調べを受けていました』

◇ロック話し終わると、照明が切り替わり、元の場所に戻る

ナカタ 『それまで妹さんは警察に通報しなかったんですか？』

ロック 『前に友達と電話で「通報したら何されるかわからない」って言ってたから』

ナカタ 『・・・ここへ来てから、妹さんは面会にきてるんですか？』

ロック 『カウンセラーと一回だけ。事件以来すっかり怖がっているらしくて』

ナカタ 『心配ですか？』

ロック 『当たり前だ。子供のときからずっと守ってきたんだ。すぐにでも佳奈子のところに行つてやりたい』

ケビン 『イイハナシダナー。でもあんたにも非があるよ。いくらなんでもバールのようなもので人を殴るのは、ねえ？』

ロック 『・・・たしかに』

ケビン 『本当は誰かを痛めつけたくてやったとか？』

ロック 『それは違う』

ケビン 『じゃあ、ガチのシスコンか。妹のために男を半殺し・・・えぐいね。「お兄ちゃんと結婚しよう！」みたいな？』

ジャック 『ケビンさん！』

ロック 『（笑う）それはないって。佳奈子は大切だけど、そういうんじゃないんだ、ホントに。俺はこれで以上です』

ケビン 『何か拍子抜けだな。まあいいや、じゃあ俺の話聞いてくれ』

ナカタ 『もう時間ないですよ。1分で済ませてください』

ケビン 『おいおい！なんで俺のときだけいつも時間がないんだよ？』

ナカタ 『59、58、54・・・』

ケビン 『あ！』

◇ケビン、あわてて前へ出る

照明が切り替わり、ケビンだけを浮かび上がらせる

照明が切り替わり、ケビンだけを浮かび上がらせる

照明が切り替わり、ケビンだけを浮かび上がらせる

ケビン 『もともと俺はスペシャルでグレートな「ハッカー」だった！

どんな大企業の機密ファイルだって、依頼があれば盗めないものは、ない！』

ナカタ 『簡潔にお願いします』

ケビン 『くっ・まず侵入するに当たって、セキュリティホールを見つけ出す。SQLインジェクションにクロスサイトスクリプティング、CSRFなどの、ありとあらゆる脆弱性を』

◇ナカタが手をたたたく。

全体照明に切り替わる

ナカタ 『なるほどわかりました。もう結構です』

◇ナカタがケビンの話を強制的に終わらせ元の位置に促す

ケビン 『なんで止めたんだ？』

ナカタ 『ぐつと来る以前に、何言ってるのか全然わかんないだもん』

ケビン 『一人くらいわかるかも知れないじゃないか？』

ナカタ 『わかりました？』

◇二人、横に首を振る。続いて正面を向いて

ナカタ 『わかりました？・・ほら』

ケビン 『なにがだよ？』

ナカタ 『今のところロックさんが優勢ですね』

ケビン 『何だよ。俺の話、ホントはもっとすごいんだぞ！』

ナカタ 『はいはい、すごいすごい』

ナカタ 『次はジャックさんの番ですよ』

ジャック 『え？・・はい』

ナカタ 『どうかしましたか？』

ジャック 『いいえ・・』

◇ジャック、ゆっくり真ん中に出てくる

ジャック 『私は、子供のときのイタズラが忘れられなくて・・あ、その、だから』

ケビン 『はつきりしゃべれよな』

ジャック 『しよ、消火器。家の近くにあった消火器をイタズラで、開けたことがあって。レバーを離したらとまるもんだと思って、でも離してもとまらなくて！』

ロック 『ジャック？』

ジャック 『ずっと言い出せなかったんです。ごめんなさい』

ロック 『何の話？』

ジャック 『あ・・。や、やめましょう。私は最下位でいいですから、もうやめませんか？』

ケビン 『それでいいんじゃないか？それなら俺2位だしな』

ナカタ 『いいんですか？この順位があとで不利になるかもしれませんよ？』

ジャック 『本当にいいんです』

ナカタ 『わかりました。では、一位がロックさん、二位がケビンさん、最下位がジャックさん。い

いですかね？』

ジャック 『はい』

ケビン 『まあ、俺が二位なのは癪だけだな』

◇決定とともに次の指令の音になる。ただし、いつもと音が違う。

ケビン 『なんだ今の音』  
ロック 『今までと違うな』

◇ナカタがジャケットの胸ポケットを探る

ナカタ 『今のはポイント二倍の音です』  
ケビン 『ポイント二倍？』  
ナカタ 『指令の達成にもっとも貢献した者は、評価点が二倍になるということです』  
ケビン 『マジか！次の指令なんだ？早く出せよ！』  
ナカタ 『いや、探してるんですけど、どっかおとしたみたいで』  
ケビン 『なに？』  
ナカタ 『あれ？箱の中かな？ないな。ちよつと探してきました』  
ケビン 『あ、ちよつと待てよ』

◇ケビンが無視して部屋から出るナカタ

ケビン 『なんなんだよ』  
ジャック 『ケビンさん』  
ケビン 『は？』  
ジャック 『さっきの話の続き聞かせてください。何で捕まったのかって話』  
ケビン 『あ？ああ、なんだ興味あるのか？』  
ジャック 『はい！』  
ケビン 『ふん。いいだろう、どうせあいつも行っちゃまったしな』

◇ケビンはジャックを座らせて

ケビン 『・・・実は俺の「模倣犯」が出始めたんだ』  
ジャック 『模倣犯？』  
ケビン 『俺はそこそこの有名なハッカーだったんだ。「サイレントハッカー」と呼ばれるほどにな』  
ジャック 『え、すごい！』  
ケビン 『そうか？でも俺の名前を語って粗末な仕事をするやつが増えたから、真似ができないように、わざと派手にかまし続けた』  
ジャック 『それで？』  
ケビン 『まあ結局、派手すぎて警察に見つかってこのごまだ。しかも俺の名前語ったやつの罪も上乗せ』

ロック 『それならあいつも同じだ』  
ジャック 『え？』  
ロック 『さっきうちが火事に遭ったって言っただろ？あの当時、ネットで「レッカ」っていう放火犯が有名になったんだ』  
ケビン 『俺も知ってるぞ。ネットで見た』  
ロック 『で、そいつの真似をする模倣犯も増えた。実際に捕まった会社員がいただろ？でも結局そいつも模倣犯だった』  
ケビン 『真似して何が楽しいんだ。こっちはいい迷惑だよ。でもまあ最終的には自称「レッカ」が自首したんじゃないか？』  
ロック 『（うなづく）何件か民家を燃やしたと告白をして。警察に呼ばれて男の顔を確認しに行っただけ、まったく知らない人だった』

ケビン 『ふーん』  
ロック 『事件以来、火を見るのが怖いんだ。花火大会ですら。子供のときは辛かった』  
ジャック 『・・・』

◇ナカタが手に封筒をもって戻ってくる

ジャック 『どうでした？』

ナカタ 『(うなづく) 指令の紙、ありました。では読み上げます』

◇紙を開いて、しばし沈黙するナカタ

ケビン 『どうした？勿体ぶるなよ』

ナカタ 『・・・最下位の者を排除しなさい』』

ロック 『どういうことだ？』

ジャック 『ほかに何か書いてないんですか？』

ナカタ 『いえ、それ以外には特に何も』

ロック 『排除って言ったって・・・どうやって？』

ナカタ 『ちよつと、わかりません』

ジャック 『・・・本当は知っていたんじゃないですか？』

ナカタ 『え？』

ジャック 『さつきから面白がっているし、私に何か起きたら困るのはあなたも同じはずです』

ナカタ 『私は本当に指令の内容は知らされていません』

ジャック 『受験者の身に危険がおよぶかも知れないっていうのに・・・そんなのおかしいじゃないです

か』

ナカタ 『いい加減にしてください。こちらが下手に出ていけば・・・いや、今はそんな話をしたいん

じゃなくて』

ジャック 『とにかく、安全にお願いします』

◇ケビンがゆっくりと壁際に歩き出す

壁にかかっている棒に手をかける

ロック 『ケビン？』

ケビン 『何でもいいけどさあ、時間は限られてるんだよな。とつと結論だそうか？』

ロック 『結論って？』

ケビン 『はは・・・悪く思わないよ！』

◇手に持った棒でジャックを狙う

ジャック 『うわあ！』

ロック 『何してるんだ！』

ケビン 『なにつて、当然だろう？最下位のやつ消せばポイント二倍。俺が貢献してやる』

ロック 『そういう意味じゃないだろう』

ケビン 『じゃあどういう意味なんだ？』

ロック 『とりあえず落ち着けよ』

ケビン 『俺はここを出る。邪魔するなら怪我しないように気をつけるんだな』

◇ケビンが棒を振り回し、ジャックをねらってる

避けるジャック、追いつけ回すように二、三撃浴びせようとする。

ロックはジャックをかばう。

ジャック 『や、やや、やめてください！』

ロック 『あんたも何か言えよ！』

ナカタ 『受験者のやり方に口を出してはいけないことになっています』

ロック 『さつき散々口挟んでたじゃないか』

ナカタ 『あれは提案しただけです。やり方を否定してはいけません』

ロック 『屁理屈ばかりだな！』

◇ジャックをかばうロックに向けて、ケビンが振り下ろした棒を避けたロックがつかむ。棒の端をそれぞれが握った状態になり、ロックが押し返す。ひるんだケビンを抑えようとロックが飛び掛る。

ロック 『ジャック、おさえろ！』  
ジャック 『はいいつ』

◇ジャックが飛び掛る前にロックを振り切ったケビンは、一度手放した棒に手を伸ばそうとする。ロックがそれを阻止しようと手を伸ばすが、僅差で間に合わない。再び棒を振り回しだすケビン。ひと悶着あり（※動きは要検討。ここでコント的な動作）一度こう着状態となる。

ケビン 『なあ、こういう指令が出るってことはやっぱり、囚人の数を減らしたいんだよね？ジャック。お前が何したか知らないけど、どうせろくでもないんだろ。ここでおとなしく消えてくれよ』

◇ケビンが大きく振りかぶったところで、ロックがナカタを前に突き出す。振り下ろそうとした棒を途中で止める。ナカタが棒をつかむ。

ケビン 『どいてください』  
ナカタ 『落ち着いて話を』

◇棒を大きく振り回し、それをつかんだままのナカタを振りほどく振りほどかれたナカタはよろけて箱に頭を打ち倒れる。次に現れたロックを棒で殴打。逃げようとするジャックを棒で制し、その勢いで転ばせる。ジャックの咽喉元を強く締め上げる。

ケビン 『（口の動きだけで）死ぬ！』

◇倒れていたナカタがゆっくりと立ち上がりケビンの背後に立つ。手に持った何かをケビンに押し当てると、大きく痙攣し倒れこむ。少しの沈黙。

ナカタ 『大丈夫ですか？』  
ロック 『なんで先にそれ使わなかったんだよ』  
ナカタ 『これは最終手段なんです』  
ロック 『大丈夫か？』  
ジャック 『最終手段ってことは、ケビンはやっぱり失格ですか？』  
ナカタ 『ええ、もちろんです。方法を問わないとしても殺人は認められません』  
ロック 『本当、お人よしだな。そいつの心配なんてする必要ないだろ？』  
ジャック 『あ、ええ、すみません』  
ナカタ 『ちよつと外に運ぶの手伝ってくれませんか？看守に医務室へ運ばせます』  
ロック 『ああ』

◇ナカタとロックがケビンを部屋の外に運び出す。運び終えて先にロックが部屋に戻る。

ロック 『ひどいな。痕になってるぞ』  
ジャック 『そんなにですか？』  
ロック 『ジャックも、医務室でみてもらったほうがよくないか？』  
ジャック 『ええ・いや、大丈夫です』

◇変な間

ロック 『大丈夫ならいいけど』  
ジャック 『まだ半分ぐらいですかね？時間』  
ロック 『たぶん。・ジャック、あのさ。・いや、やっぱいいや』

◇変な間

ジャック 『何ですか？』  
ロック 『さっき言いかけた、子供の頃の消火器の話。なんかトラウマっぽかったけど？』  
ジャック 『・トラウマか。そうかもしれないね』

ロック 『消火器が？』  
ジャック 『いや、あれはものたとえで。怒らないで聞いてくれますか？  
・・私じつは、放火の罪で捕まりました』

ロック 『え！』  
ジャック 『といっても人を巻き込んだ放火で捕まったわけじゃありません。それでも許されること  
じゃないんですけど』

ロック 『・・・』  
ジャック 『怒ってますか？』  
ロック 『いや』

ジャック 『・・・まだ小学生の頃、焚き火が大好きだったんです。たゆたう炎を見ていると無性に落ち着いて。f分の1のゆらぎっていうやつですかね？それで、火遊びできる場所を探していたんです』

ロック 『・・・』  
ジャック 『最初は近所の公園。でもすぐ大人に見つかって怒られました。次はゴミ捨て場。これがぼや騒ぎになって、近所ではちよつと有名な事件になってしまいました』

ロック 『なにやってるんだよ』  
ジャック 『そうですね。それ以来怖くなって火遊びはやめました』  
ロック 『やめてたのに、捕まったのか？』  
ジャック 『いえ、実際やめられてなかったんです。・・大人になって、仕事がうまくいかなかったり、

恋人ができなかったり、原因なんて今思えばいたことなかったんです。ただむしやくしゃして・・また、火遊びをするようになりました』

ロック 『・・人は？』  
ジャック 『巻き込んでいません』  
ロック 『そうか』  
ジャック 『結局私も模倣犯です。・・』

ロック 『・・・』  
ジャック 『ロックが嫌う放火犯なんですよ。許せないですよね？』  
ロック 『(頭を掻く)・・いや、べつに』  
ジャック 『・・怒らないんですか？』

ロック 『だってお前が俺に何をしたんだ？たしかに放火は許せない。けど俺から見たらお前はいいやつにしか見えない』  
ジャック 『ロック。・・』

ロック 『指令に失敗したらどうなるんだろうな』  
ジャック 『何か、やっぱり首が痛いですね。医務室行っていきます』  
ロック 『大丈夫か？』

ジャック 『私、やめます』  
ロック 『え？』

ジャック 『辞退します。妹さんが待ってるんですよ？』  
ロック 『い、いいのか？だって次にこの試験を受けられるのは3年後じゃ。』  
ジャック 『私の理由はくだらないですから。また次のチャンスを待ちます』

ロック 『そうか。・・わるいな。本当にいいのか？』  
ジャック 『(うなづく) 箱の人、遅いですね？』



ロック 『ああ・・・』

◇ナカタが戻ってくる

ジャック 『どうでした？』

ナカタ 『ばっちりです・・・あ、それより二人にいい知らせがありますよ！』

ロック 『いい知らせ？』

ジャック 『いい知らせ？』

ナカタ 『さっき試験の中間結果を確認してきたんですが、なんと、最下位はケビンでした』

ジャック 『え？最下位は私じゃあ・・・』

ナカタ 『ん？最下位はケビンさんですよ』

ロック 『さてさて、さっき俺たちが決めた順位だと』

ナカタ 『いや、だからあなたたちが決めた順位ではなく、実際の成績ではケビンが最下位だったん

です。結果排除されたのは最下位の人間で、指令はクリアです』

ジャック 『(ナカタから指令の紙を受け取り) 本当だ。どこにも「前の指令で決めた」とは書いてい

ない』

ロック 『ひっかけか！紛らわしいな！・・・あ、で、いまだどっちが上なんだ？』

ナカタ 『それはですね・・・それは言えませんよ！』

◇三人笑いあう。すると指令の音が鳴る。今度は元に戻って通常の音。

◇三人は笑うのをやめ、音のしたほうをゆっくり見つめる。

ナカタ 『あとは、二人のうちどちらがここを出るのかを決めるだけです』  
ロック 『最後の指令に行こう』

◇ナカタが最後の指令の紙を取り出し、読み上げる。

ナカタ 『「結果発表までおとなしく待機しなさい」』  
ロック 『・・・待機？なんだ。最後の指令だからって構えたけど、待つだけか』  
ジャック 『引っ掛けじゃないですよね？』  
ナカタ 『裏にも特に何も書いてませんね』  
ロック 『・・・暇になっちゃったな』

◇三人がそれぞれそぞろに椅子に座る

ナカタ 『・・・どちらが受かるんでしょうか？』  
ロック 『さあ？今一生懸命カメラの向こうで議論してるんじゃないか？』  
ジャック 『向こうでは何を見てるんですかね？』  
ロック 『見てるってのは？』  
ジャック 『採点基準です。たとえば、協調性とか、合理性とか、道徳心とか・・・誰が一番まともか』

ロック 『まあそんなところだろ』  
ジャック 『でも、「まとも」って何ですかね？』  
ロック 『それは・・・「普通」ってことじゃないか？』  
ジャック 『「普通」ですか・・・でも「普通」じゃないことって、おかしいことですか？』  
ロック 『え？』  
ナカタ 『やっぱでも、こうして捕まっている以上、間違ってるってことじゃ・・・ねえ？』  
ロック 『そうだ。俺たちは更生しなくちゃいけないだ』  
ジャック 『本当にそう思いますか？じゃあ、捕まっただけなら「まとも」な人ですか？反省しなくて  
もいい人ですか？マグロを捕ったら商売で、イルカを捕ったら動物虐待で。赤の他人を好  
きになったら「まとも」なのに、身内を好きになったら変態で。キャンプファイヤーは許  
されるのに、焚き火をしたら怒られる』

ロック 『そんなのは、状況が違えば認められる場合も・・・』  
ジャック 『それが「まとも」なんですか？そんな誰かの「まとも」に引きずられるの、我慢できます  
か？』

ロック 『引きずられるって、そんな』  
ジャック 『なんちやあって。やっぱ「普通」が一番ですよ。みんなの「まとも」に合わせないと生き  
づらいですから。びっくりしました？』  
ロック 『・・・きゅ、急にマジになるからびっくりしただろう』  
ジャック 『すみません』

◇ジャックがおもむろに立ち上がり

ジャック 『そろそろ時間かな』  
ロック 『え？まだ全然経ってないだろ』  
ジャック 『いや、その時間じゃないです』

◇突然サイレンとともに警告灯が点滅し始める。ロックだけがうろたえるが、ナカタとジャックは落  
ち着き払っている。

ロック 『何だ！・・火事か？』  
ジャック 『発火場所は収容棟2階のネット閲覧室』  
放送 『火災が発生しました。火災が発生しました。収容棟2階、ネット閲覧室から火災発生』  
ロック 『・・なんでわかったんだ？』  
ナカタ 『次、「収容棟2階非常口」「試験棟正面玄関」』  
放送 『続いて2箇所で火災が発生。「収容棟2階非常口」「試験棟正面玄関」で発火。速やかに  
「試験棟1階東通用口」から避難してください』  
ロック 『え？二人とももしかして・・エスパー？』

◇ロックがナカタのほうを振り返ると、スタンガンを向けて立っている。

ロック 『なんの冗談・・』  
ナカタ 『動かないでください』  
ロック 『・・・え？なにこれ』  
ジャック 『計画通りなんですよね？』  
ナカタ 『はい。さつき確認してきました』  
ロック 『待てよ。この騒ぎはお前たちが？』  
ナカタ 『・・・』  
ジャック 『そうですけど』  
ロック 『そうですけど・・そんな、ずっとここにいたじゃないか』  
ジャック 『準備したんです。今日のために』  
ロック 『どうやって？・・だいたい何でそんな』  
ジャック 『受かる保証もない試験でここを出ようなんて思っていないからですよ』  
ロック 『・・脱獄しようとするのか？』  
ジャック 『ここまでやって、「子供のいたずら」だと思います？』  
ナカタ 『ジャック、そろそろいかないと・・』  
ロック 『行くってどこにだよ？脱獄なんかできると思ってるのか？外にはびっしり看守がいるし』  
ジャック 『・・・』  
ロック 『来ないなら行きます』  
ジャック 『待って。あれだ、脱獄なんてやめとけよ。どうせ成功しないだろ』  
ジャック 『说得ですか？それとも付いて行って大丈夫か確かめるとか？』  
ロック 『そんなんじゃない』  
ナカタ 『ジャック』  
ジャック 『火が来るまであと5分。あまり詳しく説明できないけど・・。箱の・・いや「ナカタ」さん、説明してあげて』  
ナカタ 『え？ああ。収容棟にいる限り監視が厳しくて脱走をしようとすれば、すぐに捕まる。それに対して、ココ、試験棟の「1階東通用口」だけは外の壁との距離が5メートルもないんですよ。だからこのパニックに乗じてゆつくり最後尾で逃げてきて、壁の外から引き上げてもらおう計画なんです！』  
ジャック 『おいおい、まさかだな。この人全部言っちゃったよ』  
ナカタ 『それを手伝った報酬に・・』  
ジャック 『もういいよ。まだ言う気なのか。ねえ、天然？』  
ロック 『今の話本当なのか？』  
ジャック 『私の計画は完璧です』  
ロック 『・・・』  
ジャック 『来るの？来ないの？』  
ナカタ 『ジャック、煙が』  
ジャック 『え？少し早いな』

◇周りにはいつの間にか煙が立ち込めている

ロック 『何でこんなことするんだ？』  
ジャック 『だからここから出るために』

ロック 『そうじゃない』  
ジャック 『なにが？』

ロック 『一歩間違えば誰か死ぬかもしれない』  
ジャック 『それが？』

ロック 『さつき、人は「巻き込んでない」って言ってたじゃないか』  
ジャック 『ああ。だって人を巻き込んで捕まったら「殺人」じゃないですか。さすがに殺人の罪では捕まりたくなかったっていう、ね？』

ロック 『じゃあ、お前がここを出たい理由って何なんだよ？』

ジャック 『たいした理由じゃないですよ。「火が見たい」それだけです』  
ロック 『ふざけんな！』

◇ロックが、ジャックに詰め寄る

ロック 『お前みたいなヤツのせいで、うちはっ・・・！』

ジャック 『んもう、離してください』

ロック 『さつき言ってた「模倣犯」って誰の模倣だよ？』

ジャック 『もう・・・せつかく気を使って隠してたのに・・・』

◇ジャック、ロックを振り払って、ナカタからスタンガンを奪い取る

ナカタ 『あ！しまった』

ジャック 『ロックが大嫌いな放火魔。「レッカ」です』

ロック 『この・・・』

ナカタ 『本当にそろそろ避難しないと全員逃げ遅れます』

ロック 『なんで巻き込むんだよ。火がみたければ焚き火でも何でも勝手にやれよ！』

ジャック 『そんなの逃げ遅れる方が馬鹿なんだから』

ロック 『・・・今なんて言った？』

ジャック 『こっちは関係ない場所を燃やしてるだけなのに、いい迷惑なんですよ』

ロック 『いい迷惑・・・？』

ジャック 『勝手に巻き込まれて、恨まれる身にもなってほしいなあ』

ロック 『やめろ・・・』

ジャック 『ずっと、ずっと頭から離れなかった！だからさあ、もう今度からは我慢しないで人が住んでるとこ狙おうかなって。家族っていいですよね』

ロック 『やめろっつて』  
ジャック 『「レッカ」を超える。真似じゃなく、今度は私がオリジナルになるんだ！』  
ロック 『やめろ！！』

◇ロックふたたびジャックに飛び掛るが、避けられる

ジャック 『止めれるもんなら止めてみせてよ。どうせ誰も私を止められないんだ』

◇ロックにスタンガンを突きつけて気絶させる  
それを見て一瞬へたり込むジャック。

ナカタ 『ロック！』

ジャック 『ああ、もう、なんでだよ・・・暴れるから』

◇へたり込むジャックの隙を見て、入り口の方へと駆け寄るナカタ

ナカタ 『す、すぐ戻ってくる！』

◇いつしか警告灯の点滅は消えている。  
外から所長が七輪を手に入ってくる。  
呆然とするジャック。

所長 『何か騒がしいね。大丈夫？』

ジャック 『・・・』

ナカタ 『何ですかそれ？』

所長 『塩焼き・・秋刀魚の。煙たかった？ごめんね？』

放送 『ご協力ありがとうございました。これにて避難訓練を終了します。速やかに解散してください。』

ジャック 『・・・え？どうということ？どうということだ！』

所長 『あ、ちよっと待ってね』

◇手に持った七輪をゆっくりおろして、秋刀魚をひっくり返す

ジャック 『おい！！』

◇ジャックが所長につかみかかり、スタンガン突きつける

ナカタ 『あ、所長』

ジャック 『こうなったらこいつを人質にして』

所長 『今日試験を受ける君たちにはあえて知らせてなかったけど、緊急で避難訓練をすることにしたんですよ』

ジャック 『は？！』

所長 『「ジャック」くんの計画がある人物から聞いてね』

ジャック 『誰ですか？！許さない！』

所長 『いやあ、なかなかボロを出さないから苦労しましたよ。しばらく泳がせたら何か出ると思っ・・・』

ジャック 『まさか』

◇所長はナカタに視線を向ける。

所長 『ご苦労さまでした』

ジャック 『そんな・・・。何ですか！？』

◇所長、さりげなくジャックからスタンガンを奪う

ジャック 『あっ』

所長 『じゃあこの辺で観念してもらいましょうか』

◇所長、ジャックの肩を軽くたたく。それをはたくジャック

所長 『まじめにやってくれば、またチャンスは来ますから。次回は3年後、いや5年、10年はか

かつちやうかな？・・・はい、これ持って』

◇所長はジャックに七輪を持たせて部屋をでようとする。

ジャックは立ち止まり振り向く。気絶しているロックのほうをゆっくり見る。

ジャック 『こんなはずじゃなかったのに・・・本当のこと教えてあげます。ボクが止められなかつ

たのは、消火器なんかじゃない。

本当に止められなかったのは、「ゴミ捨て場」の火の方です』

☆第6場・エピローグ

◇試験終了を告げる音が鳴る  
ジャックは、ロックをしばらく見つめてから部屋を出る。

ナカタ 『あ！ロックさん！忘れてた。大丈夫ですか?!』

ロック 『・・・う』

ナカタ 『しつかり』

◇ナカタがロックに肩を貸し、椅子に座らせる

ロック 『いた・・・』

ナカタ 『大丈夫ですか?』

ロック 『あんまり』

ナカタ 『医務室に行きましょう』

ロック 『・・・』

ナカタ 『どうしました?』

ロック 『きっかけは、些細なんだよ。いつも』

ナカタ 『・・・?』

ロック 『だれの目にも付かなくて、だれにも止めてもらえないと、だんだん手がつけられなくなつて』

ナカタ 『何の話ですか?』

ロック 『はじめのうちなら自分でもやめられたはずなのに』

ナカタ 『・・・ジャックのことでしょうか?』

ロック 『いや』

ナカタ 『大丈夫ですか?』

◇ロックは少しうなだれて、ふと顔を上げる。あげた先の視線は時計のほうを向いている。  
再び所長が封筒を手に戻ってくる。

所長 『これをもちまして、試験は終了です。いまさら結果発表する必要ないかも知れませんが

まあ形式上の物ですのでしばし辛抱を。あ、その前にナカタ主任看守』

ロック 『主任看守!?!』

所長 『ありがとうございます。おかげで火災を未然に防ぐことができました。約束どおり今回の脱獄計画に関与したことは不問とします。そして頼まれたあれをもってきましたよ』

◇所長が懐から「あれ」を取り出してナカタに渡す

ナカタ 『これ欲しかったんですよ！ありがとうございます。・・・あ、今回のことは本当にすみま

せんでした・・・』

所長 『いいのいいの。誰だって欲と良心を天秤にかけてしまうものです。紙一重でそっち側に行かなくてよかった』

◇ナカタ、所長に深く一礼をし、「あれ」をもって去る

ロック 『いいんですか?』

所長 『いいんです。私がいいといえば。これで収まる和もあるんです』

ロック 『・・・』

◇所長が封筒の中から、合格通知書を取り出す。

所長 『では、結果発表をします。囚人番号「609」。右の者は、今試験において冷静に行動し、大きな混乱を招くことなく収束させることができました。よって、社会適合能力が十分に備わっていると判断し、釈放することを許可します。・・・おめでとう』

ロック 『ありがとうございます・・・』  
所長 『さあ、胸を張って世間に出てください。荷物はこちらでまとめましたから受付で受け取ってください。おつかれさまでした』

◇所長去ろうとするが、立ち止まりロックのほうを振り返る。

所長 『ああ、忘れるところでした。あなた宛に預かっていたものがあるんです』

ロック 『これは？』

所長 『妹さん、結婚されるそうですよ』

ロック 『え？佳奈子が？』

所長 『ええ、あなたがいない間、妹さんに寄り添っていた彼がいたそうです。もうすっかり怪我の具合もよくなったようです。その方と挙式されるみたいですね』

◇ロック、所長から受け取った封筒をあけ、緊張気味に中身を確認する。

所長 『あなたがここを出るの間に間に合うかわからないが、渡してほしいと言っていました。それから手紙のほかに招待状が添えられてるはずですよ』

ロック 『・・・』

所長 『もう、君が守らなくても、妹さんはちゃんと幸せになれるでしょう』

ロック 『・・・佳奈子・・・』

所長 『では、次の試験がそろそろ始まるので、これで』

◇所長去る。

ロックは手紙をじっくり読んでいる。体が小刻みに振るえ、手に力が入る。しばらくして体のこわばりを解き、ふっと顔をあげる。

まだ未開封の招待状を両手でつかみ、ゆっくりと、しかし少し力をこめて破る。

◇暗転

ロック 『・・・佳奈子！・・・』

— 完 —

■カーテンコール

暗転後、役者陣舞台中央に集合している。

準備ができ次第照明がつき、全員でお辞儀をし幕を下ろす。

タイミングについては場当たり等で調整が必要。